南葵音楽文庫ミニレクチャー　vol.7 記録

世紀転換期のベルリン

泉　健（和歌山大学名誉教授）

2018 年 1 月 27 日（土）11:00

南葵音楽文庫閲覧室（和歌山県立図書館内）

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

徳川頼貞がイギリスに留学したのは 1913 年（大正 2）でした。今回はその 12 年前のベルリンにおける音楽生活を振り返ってみます。取り上げるのは、現代音楽の作曲家シェーンベルク,A.と女優第一号と言われた川上貞奴の出会いです。時は 1901 年（明治 34）12 月、所はベルリンのケペニック通りに新設されたブンテ劇場でした。

ウィーン生まれのシェーンベルクを 1901 年 12 月にベルリンに連れてきたのは、ヴォルツォーゲン,E.v.でした。彼はケペニック通りに新設されたブンテ劇場の楽長としてシェーンベルクをスカウトしたのです。契約は 1902 年 7 月までで、300 マルクの月給という約束でしたが、ブンテ劇場は経営難のために半年もしない内に閉鎖されてしまいました。

一方、川上貞奴は 1900 年のパリ万国博覧会に出演した後、翌年ベルリンに来て、1901 年 11 月 18 日から 12 月 7 日まで中央劇場で公演し大好評を博しました。その結果、同年 12 月 10 日から 19 日までブンテ劇場出演の契約が結ばれ、川上一座は「漁師そろく」（「ヴェニスの商人」の翻案劇）「左甚五郎」（京人形）「将軍」を演じました。従ってその 10 日間は、27 歳のシェーンベルクと 30 歳の川上貞奴が同じ劇場にいたわけです。

残念ながら両者の接触の具体的記録は残っていませんが、ジャポニスムの高まりの中にあったウィーンで育ったシェーンベルクは、踊る川上貞奴を舞台袖で見たでしょうし、また川上貞奴も、シェーンベルクの「警告」や「ガラテーア」などの歌曲を聴いた可能性は大いにあり得ます。詳細は拙稿「ベルリンの川上貞奴(1901 年)」『和歌山大学教育学部紀要人文科学』第 63 集,2013 年,pp.69-84 をご覧ください。

シェーンベルク(チェロ奏者 1895 年頃)
『ニューグローヴ世界音楽大事典』7 巻

川上貞奴(1900 年頃)
神山彰編『演劇のジャポニスム』